

序

近年になって郷土の遺産ともいるべき、数々の遺跡を保存するとともに地域の土壤に育くまれた伝統文化の保護などに対する関心は高まりを見せつつあります。未来にわたる豊かな社会づくりは、地域開発と伝統文化との調和によってこそ実現されるものといわねばなりません。

この度、上佐山山麓に平和公園が建設されるにあたり、この一帯丘陵地が、埋蔵文化財の包蔵地として知られていることから、建設工事の進行状況にもとづき、文化財保護の立場にたって発掘調査を実施してまいりました。その結果、土器などの遺物が出土し弥生時代の遺跡であることが確認されましたので、これら貴重な遺物と、その記録の保存につとめることになりました。

今回、調査概報を発刊するにあたり、本書が関係者の参考資料として活用されることを念願するとともに、この調査にあたりご協力をいただいた調査員をはじめとする関係の方々に敬意を表しますとともに感謝いたします次第であります。

昭和49年12月1日

高松市教育委員会

教育長 伊藤栄四郎

ま と き

高松市の南部三谷地区と山田地区にまたがる上佐山周辺には遺跡が多く分布している。

中でも顕著なものとして、古墳や城跡が所在するが、路傍などではしばしば発見される土器片・石器などによって縄文時代から弥生時代にかけての遺物散布地としても知られ、この付近一帯は、古代人の生活遺構も所在するものと推定されている。

これらの状況により市の平和公園建設予定区域である上佐山山麓一帯は埋蔵文化財保護のため現地踏査がなされ、包蔵地と思われるA地区およびB地区の第1次調査地について昭和45年度に発掘調査を委託実施した。その結果A地区からカメ棺群が出土し、弥生時代の埋葬施設であることが確認された。

次いで、49年度に平和公園建設予定地内A地区の西方B地区において、土器の露出、土器片の散布などが報告され、再度、発掘調査を委託実施した。その結果、弥生時代の土器片が出土したが、磨耗したもののがほとんどであることから人為的な地山の攪乱に加え、自然的条件による地肌の流失などが度重なり遺構ならびに遺物の破損が繰り返されたものと推定されたが、一部の区域については比較的に攪乱されていない部分があり、この部分からは磨耗の少ない高杯・壺などの大きい破片が出土したことから、弥生時代の遺跡が存在したことが確認された。

この間48年度においては、上佐山東麓（池田町本村）において、遺物包蔵地の発掘調査を委託実施し、縄文時代の土器を含む弥生時代の土器片多数と、土器完形品数点が出土したのであるが遺構の存在は確認できなかった。

これらの調査により、この付近一帯が弥生時代人の生活拠点であったことが判明したが遺構の所在究明については将来にわたる課題である。

調査にあたっては、小竹一郎氏（高松市文化財保護委員）を団長とし、松本豊胤氏（県教委文化財調査係長）の指導をうけ、四国学院考古学研究グループ、井上れい子（A地区調査）立正大学生幸藤義行・町川義晃などの各氏（B地区調査）を中心にして調査を実施したが、関係各位の多大な御援助・御協力をいただきましたことを感謝申し上げます。

目 次

一	位置と周辺の遺跡	1
二	通谷 A 地区調査	5
三	通谷 B 地区調査(第1次)	11
四	通谷 B 地区調査(第2次)	15

挿 図

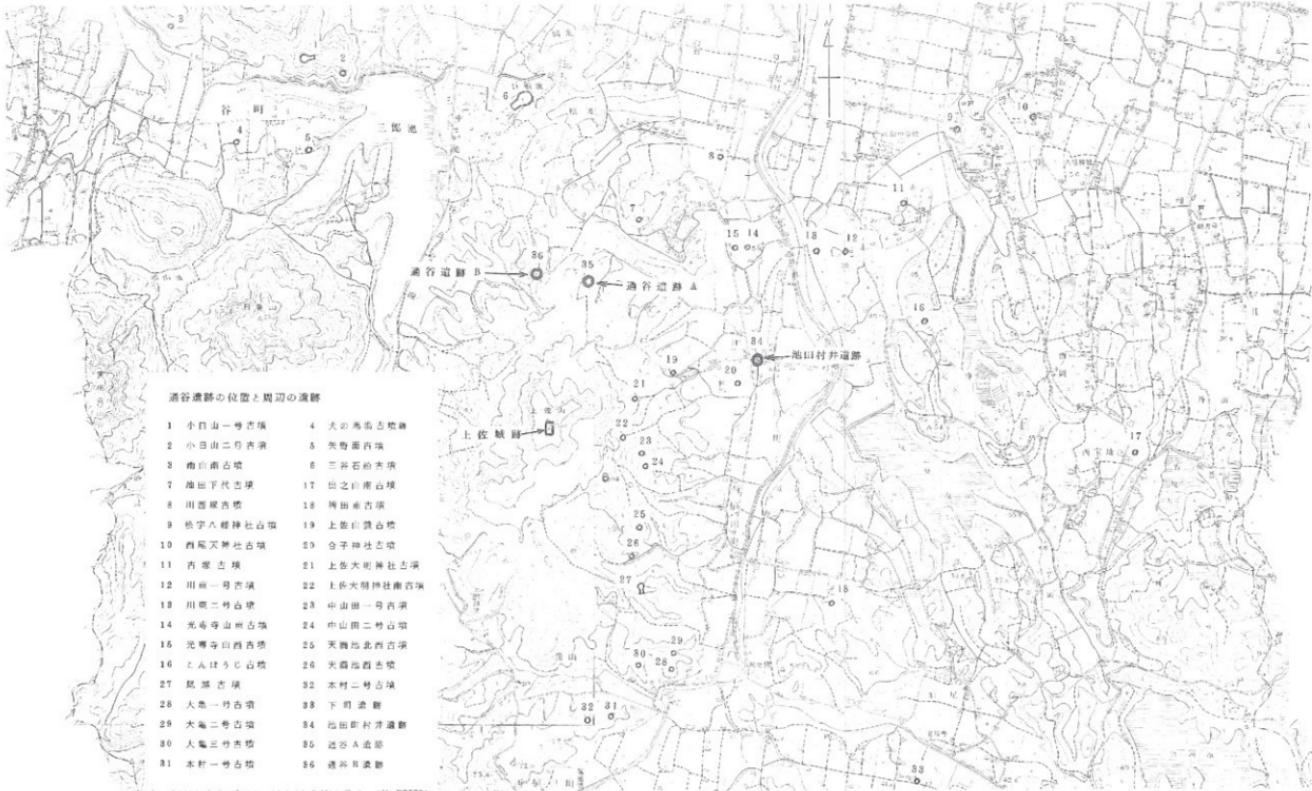
第 1 図	通谷遺跡の位置と周辺の遺跡	
第 2 図	調査地区位置図	4
第 3 図	1号壺棺出土状況	5
第 4 図	2 " "	6
第 5 図	3 " "	6
第 6 図	4 " "	7
第 7 図	5 " "	8
第 8 図	6 " "	8
第 9 図	土壤墓遺構	9
第 10 図	配石遺構	9
第 11 図	第1次調査地区全景	11
第 12 図	B地区地形測量図(第1次)	13
第 13 図	B地区全景	15
第 14 図	B地区トレンチ	16
第 15 図	a点遺物出土状況	17
第 16 図	a点遺物	17
第 17 図	b点遺物出土状況	18
第 18 図	b点遺物	18
第 19 図	c点遺物出土状況	19
第 20 図	c点遺物	20
第 21 図	d点遺物	21
第 22 図	e点遺物	21
第 23 図	f点遺物	22
第 24 図	g点遺物	22

図 版

第 1 図	A 地区地形図	25
第 2 図	C-D, C-E セクション	26
第 3 図	壺棺出土状況(1・2・3・4 号)	27
第 4 図	" (5・6・7 号)	28
第 5 図	壺棺復元図 (1・2 号)	29
第 6 図	" (3・4 号)	30
第 7 図	" (5・6・7 号)	31
第 8 図	土壤基実測図	32
第 9 図	配石遺構実測図	33
第 10 図	B, C, D 遺物実測図	34
第 11 図	B 地区遺物復元図	35

第1図 通谷遺跡の位置と周辺の遺跡

○印 円溝 ◇印 前方後円墳



一 位置と周辺の遺跡

高松市三谷町通谷2851の1にある、通谷A・B遺跡は、高松平野南辺に聳える標高255.7mの上佐山北麓・山尾が瀬崎にも分かれた小丘で、B遺跡は女体神社の社地から北に伸びた稜線で標高は65mから57m、A遺跡は尾根一つへだてた東側にある稜線である。この付近からの遠望は絶景で、西方には三谷三郎池が獨々と水を擋えており、前方はるか高松平野と、更に遠く瀬戸内海が結べきに輝やいている。

北方約1.5kmを東西に県道12号線が通じているが、旧南海道はこの道路に近い道筋であったといわれている。従って三谿駅もその道沿いにあって古くから高松平野南部の文化地域であったことをしのばせる。

この周辺地域は山麓沿いの丘陵地と、平野部との接点に当る地域で、有史時代よりも更に古い時代すなわち、縄文時代後期から、弥生時代、古墳時代に亘る遺跡が数多く知られ、これらの遺跡地帯でもあることを物語っている。

先ず北西に聳える、日山の南麓小日山頂上西端には、小日山一号古墳があり、前方後円墳で墳丘の軸長は28m。

小日山南東腰部には、小日山二号古墳が知られ円墳で墳丘の直径は10m。

日山の西に続く、雨山南麓には、雨山古墳があり、円墳で横穴式石室をのこしている。

日山と火妻山の中間平地には、犬の馬場古墳跡がある。

犬の馬場、三谷三郎池西沿いには、矢野面古墳があり墳丘の直径14m、高さ5m、その横穴式石室の残存部は全長9.8m、玄室の奥行3.8m巾2.5m高さ3m、墳丘並びに石室の保存良好で、高松市の代表的な横穴式石室である。

北方の石船池沿いの森には、三谷石船古墳があり、前方後円墳で、墳丘の軸長90m、後円部直径50m、高さ4m、前方部巾37m、高松市内現存の前方後円墳では最大のもので後円部中央に、刎抜式石棺の棺身が露出している。

北東に見える小丘松林には、池田下代古墳がある。直径15mの円墳である。

池田市場バス停の北西に、川西塚古墳跡があり、墳丘の一部を残している。

川島東町宮尾、松宇八幡神社馬場横には、松宇八幡古墳があり、円墳で直径10m。

十河西町西尾には西尾天神社古墳が知られ円墳で、墳域の直径15m、高さ3m。

川島東町山南には古塚古墳跡があり、円墳で墳域の巾6m、長さ8m。

池田町川原には古墳二基が知られ、一号古墳は蓮池の東方約50mの小丘にあった円墳で、昭和5年発掘され、銅鏡一面、玉の類等を出土した。二号古墳は、一号古墳の西方約150mにある円墳で直径7.5m、高さ1.5m。

池田町市場の光寿寺山には古墳が二基あり、東古墳は丘頂の東寄りにある。墳域は四角形でその一辺の長さ約18m、高さ約3m、との墳形は失なわれている。西古墳は丘頂の西寄りにある。円墳であるが

もの形は崩されている。

川島東町・こんばうじ下池、東沿いの森に、こんばうじ古墳が知られ、墳域の一部をのこしている。

十川東町・出之山には、出之山南古墳跡があり、墳丘は殆んど失なわれているが、小さい土塁が僅かに痕跡をとどめている。

西植田町稗田東に、稗田東古墳が知られ墳域の一部をのこしている。残存墳域の直径7m。

池田町下山田には、上佐山麓古墳が知られ円墳で、墳丘は削平されているが、横穴式石室をのこしている。

池田町の合子神社境内に、合子神社古墳があり、墳丘は削平されてお旅所になっている。円墳で墳域の巾14m、長さ18m。

池田町中山田、上佐大明神社には上佐大明神古墳が知られ、円墳の墳頂に大明神社が祀られている。残存墳域の直径12m。

上佐大明神社の南方稜線上に、上佐大明神社南古墳があり、円墳で、直径18m、高さ2mの墳丘をのこしている。

池田町中山田、黒助池北東の小丘上に中山田一号古墳があり、円墳で残存墳丘は直径12m、高さ2.5m。

中山田一号古墳の南東下方に、中山田二号古墳があり円墳で残存墳域の直径8m。

西植田町天溝・天溝池北西古墳は円墳で直径10m墳域は擾乱されている。

天溝池西古墳は、天溝池の西方小丘上にある円墳で、墳丘の直径10m、高さ2m、完形を保っている。

西植田町尾越池東南稜線上に尾越古墳がある。前方後円墳で軸長36m、後円墳直径21m、高さ6m、前方部巾15m、高さ2.4m、円筒埴輪や家形埴輪を出土していることで、よく知られている。

西植田町備前谷、大龜橋北上方の稜線上に三基の古墳がある。大龜一号古墳は大龜橋北上約100mの丘陵端にある円墳で、残存墳丘の直径15m、高さ3m。

大龜二号古墳は、一号古墳の北隣りにある円墳で、残存墳丘の直径18m、高さ3m。

大龜三号古墳は、二号古墳の北西約100mの稜線上にある円墳で、残存墳丘の直径18m、高さ5m、円筒埴輪を出土している。

西植田町本村北の小丘東端に、本村一号古墳跡がある。墳丘は削平されているが、残存墳域の直径は13m。

本村二号古墳は、一号古墳の西方約100mにある円墳で、墳丘の長径17m、短径14m、高さ2m。墳丘の北端部は茶園造成のため一部削り取られている。

東植田町下司荒神社境内と道路一つへだてた西沿い地域に、下司遺跡があり弥生式遺物の出土で知られている。

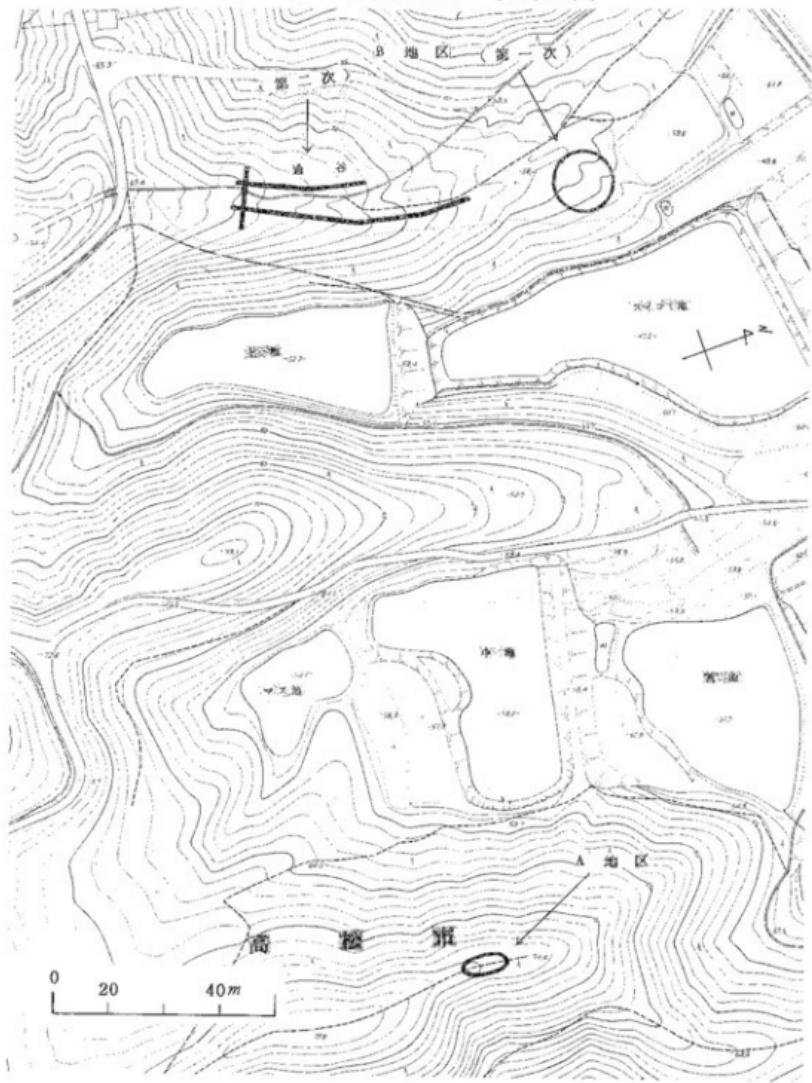
池田町討井遺跡は、合子神社の北東にあり、弥生式遺物のみならず、縄文式遺物も発見された遺跡として注目をあびている。

三谷町通谷A遺跡は、通谷B遺跡と山尾一つ隔てた東側の山尾にあって弥生式塚壇七基と土壙墓、配石遺構等が群在していたことが明らかにされている。

更に通谷遺跡の西方に溝々と水を湛えた、三谷三郎池の池底一帯からは、多数の弥生式遺物が発見されており、特に池底南半部は大規模な弥生式遺物の散布地・包含地として知られている。従ってここには恐らく弥生時代の遺跡が存在するのではないかと期待されている。

上記の通り三谷町通谷遺跡の周辺地域は遙く縄文時代から、弥生時代、古墳時代に亘る遺跡が群在している地域であることに注目したい。

第2回 調査地区 守禰区



二 通谷 A 地区調査

1. 調査の経過と遺構

○ A 地区 (図版第 1 図・第 2 図)

上佐山の北麓から派生した尾根の突端近く約 40m, 幅 10m 程が A 地区遺跡である。露頭は稜線の中央部から突端に向って約 40m のトレンチを設定した。このトレンチより稜線の突端近く約 15m の箇から三箇の壺棺が発見され、更に突端から 30m 程の地点に配石遺構があり、この西方に一基の土塙が発見され、更に特に壺棺が群集していると思われる尾根の北端約 100 平方 m の全面的な調査により、四箇の壺棺と配石遺構が発見された。

すなわち、全部で七箇の壺棺と、一基の土塙と配石遺構が確認された。

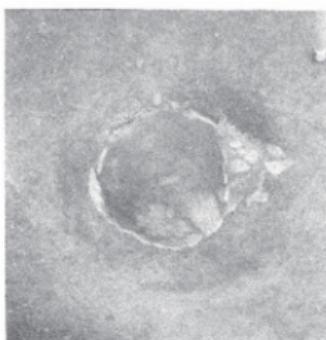
○ 1 号壺棺 (図版第 3・5 図)

出土状況

2 号棺の南方約 7m にあり、小形の壺形土器の口辺部を打ち欠いて用いている。長径 6.0cm, 短径 5.0cm, 深さ 2.0cm の土塙の内に安置され、身と蓋よりなる。蓋は浅鉢形の土器を使用している。又蓋の所には 5cm から 10cm 程の安山岩の小石が二箇置かれていた。主軸の頭部の方位は西方であり、ほぼ水平に埋められている。

形態

身である壺形土器は、高さ 3.9cm, 口径 1.7.1cm を測り、最大幅 3.5cm, 底径 7.5cm を測る。平底の均整の取れた壺である。底の厚さは 9mm と大変薄い。底部からほぼ三分の一に中心がある。胎土は内側はかなり悪く、石英の白い砂粒を多量に含み、黄褐色を呈している。はけ目、整形の跡は別に見られない。蓋である浅鉢形土器は原形をとどめないまでに破壊され、口縁部を 1.5cm 程残すのみであって復元はできない。外側は黒色を呈し、内側は茶色を呈す。3 号棺のとよく似ているが本棺の方が口唇部が厚い。この他に壺形土器と思われる小さい口縁部のかけらが一片出土していたことを付記しておく。



○ 2 号壺棺 (図版第 3・5 図)

出土状況

3 号壺棺の南 3m にあり、傾斜角約 40 度で方位を、ほぼ北西にとり、長径 8.0cm, 短径 7.0cm の土塙の中に安置されており、頭部に石を 2 箇置いてあった。

身と蓋があり、同れも壺形土器を利用している。表面三分の一程が欠けている。

形 感

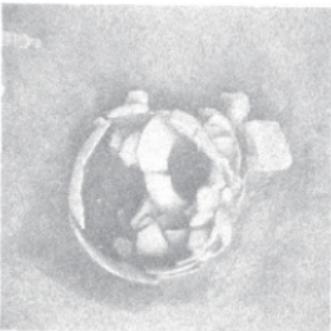
身の方は平底の壺形土器の口縁部を欠いている。底径9cm、最大巾5.1cm、高さ5.3.5cmを測り、口径15.5cmを測る。頸部には刻み目のある凸帯が廻らされており、5cm位の巾に、整った、はけ目が施され、又全体にわたって、それよりやや日の大きい、はけ目がなされている。

内側は頸部より10cm程下がった所に等間隔で三本の深い横線があり、中心より底部にかけては、指跡が見られる。

色は内外共によく似た色を呈し、茶褐色である。

蓋に用いられた壺も頸部下半を欠き、口縁部を欠いて上半部を用いている。

この他に、片口の鉢形土器の口縁部の破片が出土しており、外側には、たたき目があり、黄褐色を呈している。



○ 3号壺棺 (図版第3・6図)



出土状況

2号棺の北3m程にあり、主軸を南東においている。土壤の規模は径80cm程のほぼ円形で、地形そのものが10度程の傾斜をもつが棺も約50度の傾斜をもっている。

身と蓋とからなり、身は平底の壺形土器で、口縁部を欠いている。蓋は浅鉢形土器が用いられており、身だけ僅か三分の一程の形を止めるに過ぎない。蓋は全く原形を止めない。

形 感

身である壺形土器は高さ5.8.4cm、最大巾6.4cm、底径8cm、口径3.0.5cmを測る。非常に脹張りが強い。外面は赤茶色を呈し、頸部下と底部付近に、はけ目が見られる。内面は黒っぽい色を呈し全体に5cm位の長さで、はけ目がついている。中心から蓋部に向かっては漸若な約8cm巾の輪筋の跡が四段にわたって見られる。頸部には指頭で押しつけた凹みがみられる。

蓋である浅鉢形土器は口径4.5cm、高さ1.6.8cmを測る。表面は底を中心にして直交した、へら型

りらしき跡があり、内側は上方は巾1.5cm程の、はけ目があり、底部はそれと反対の方向の、へら削りが残存している。内外共に黄褐色を呈する。

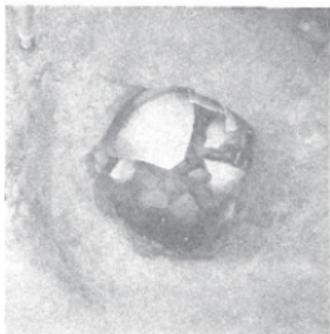
この外に径18.6cm程の朝顔形の口縁部の破片も混入していたことを付記しておく。

本棺は横蓋式で、埋葬当時は土器の法墨から全長71cm、内法の全長69.2cmを測る。

○ 4号壺棺 (図版第3・6図)

出土状況

2号壺棺の東約3mにあり、身と蓋をもった棺である。
埋葬は長径1.2m、短径7.0cm、深さ4.0cm程の土壌の内
に傾斜角約20度で安置され、主軸は頭部をほぼ西に向
いている。頭部にあたる位置に安山岩二箇が、そしてほぼ中
央にも一箇置かれていた。内部に副葬品は見られない。



形態

身は口縁部を打ち欠いた壺形土器で、高さ67.5cm、口
径18.5cm、底径12.3cmを測る。外面は中心より上に3
cm程のはけ目がある。石英質の砂粒を全体に含み、一部
胴より下に厚さ3mm程のうすい所がある。外、内面共に黄褐色を呈する。

蓋は浅鉢形土器が二箇あり、やや大きさを異にする。大きい方は口径44.3cmを割り高さはほぼ20cm
を推測する。丸底の片口土器である。口縁部はやや外反している。石英質の砂粒を少し含み焼成は良好で
ある。

小さい方は復元して完形品となり、口径34.7cm、高さ16.4cmを測り、口縁部はやや外反している。
丸底の片口土器である。同じく石英質の砂粒を少し含み、焼成は普通で胎土はやや悪い。

この三つの土器の用い方は、壺形土器を身とし、その蓋として、大きい浅鉢形土器をかぶせ、更に小さ
いのをかぶせたと思われる。その場合全長82.5cm、内法の全長は75.5cmとなる。

○ 5号壺棺 (図版第4・7図)

出土状況

4号壺棺の北約3mにあり、大部分が削り取られて長径7.0cm、短径5.0cmの土壠の底部に僅かの破片
を残すのみの状態であった。

主軸の頭部の方位は、ほぼ西方であり、傾斜角は5度位で、ほぼ水平に近い。

形態

底径10cmで角が少し取られている。高さは7cmしか復元できず、底径に比して厚さが薄い。底部の中

央には $2.1\text{cm} \times 1.1\text{cm}$ の孔があけられており、内側から穿孔されている。内側には凸凹がはげしく、内外共に黄褐色を呈し、白い石英の砂粒を含む。

底部は穿孔があるが、棺を 5 度の傾斜で横たえた場合、棺内に水溜りの出来る最も低い位置にはならない。



○ 6号棺蓋 (図版第 4・7 図)

出土状況

南北尾根のセンターに入れたトレントの最上部、2号棺より 4.0m も上方に一基出土している。埋葬状況は他の例と同様で、長径 7.0cm 、短径 6.5cm 、深さ 2.5cm の土壇に傾斜角 45 度で蓋棺が安置



されていたが、大部分が削り取られて平底の底部を僅かに残すだけである。

形態

頭部より下方だけを残存しており、これも壺形土器であろう。高さ 3.6cm 、口径 5.0cm 、底径 1.1cm を測り、角が少しあっている。底は厚く、表面は上から 1.0cm 程は横に 3 倍巾のたたき目らしい凸凹があり、それに直交して、はけ目の存する所もある。以下底部にかけては縦にはけ目が見える。頭部は輪積みのためか二段に横に割れている。

○ 7号壺棺 (図版第 4・7 図)

出土状況

本棺のみは以前に土器のみ取りあげており、本調査に於いては、その跡だけしかわからない。5号棺の土壇に隣接している。径 7.0cm 、深さ 3.0cm 程のはば円形の土壇があり、今回は何も出土していない。主軸の頭部の方向は西方と思われる。

形態

本棺は全体の三分の一程度のみ残存し、口縁の立ち上がりの部分が 5cm を残すのみで、この立ち上がり

りの部分の上にコの字形の口縁がくっつくようである。高さ 5.0 cm、最大巾 4.9 cm、底径 9 cm で角がとれている。外側は全体に薄いはけ目があり、内側は肩より下で底より上方 1.7 cm 程の間には、かなり顕著な横のはけ目がついている。肩より上には指頭で押しつけた凹みがある。白い石英の砂紋を少量含む。

○ 土墳墓 (図版第 8 図)

1 号棺の南西 1.0 m の平坦地に、主軸をほぼ東西に向け、長径 2 m、巾 7.0 cm、深さ 3.0 cm の土壙が掘られている。

内部からは遺物は何も出土していない。今回の調査では一例しか発見されていないが、これが埋葬施設であることは、ほぼ疑いないであろう。



○ 配石遺構 (図版 9 図)

尾根の中央部に巾 1 m、長さ 7 m 程の溝が掘り出された。広い所では 1.5 m を測り、表土より 3.0 cm を測る。

内部には礫が散かれているが、その内部からは特に遺物は発見されておらず、ただ 2 cm ~ 3 cm 程の土器細片が 2 - 3 点出土しただけである。

しかも、この溝の両端が弧を描くように東に延びているのである。この構が何を意図したものか、他の類例を俟って更に解明したい。



2. 結語

以上 A 地区に於いては、2・3・4・5・7 号棺の 5 基の壇棺が群集しており、1 号・6 号との壇棺群から離れた所からも、壇棺 2 基が出土した。その他、一基の土墳墓と配石遺構が確認された。このように同一尾根の、しかも突端に近い極く限られた地区に、多くの遺構が含まれていたことは極めて興味あることである。

この A 地区では配石遺構は発見されているが、その他の遺構は見られず墳墓に限られている。多少の弥生式土器片を伴出しているが、この地区が弥生時代の、おそらく同一家族集團の墓地として利用されたものであることはほぼ疑いないことであろう。

しかも、その立地が住居地区と離れた小高い山丘の尾根に立地していることは、前期古墳の立地条件と

-致する所で、墳墓の地として特に本地區が選択された所に特別の関心をそそる。

県下では董帽の出土例は十指に余るが、本格的に調査されたのは数少ない。この点、この通谷A 遺跡
調査の意義は大きい。

三 通谷 B 地区第一次調査

1. 調査の經過

○ B 地区第一次調査地

墓地公園予定地内の最高所に女体神社があり、ここから派生する尾根の末端一帯が弥生式遺物の散布地である。樹木が少なく山肌は流水による浸蝕が著しいため、各所に崩ができ遺物包含層を流し去って地山が露出している所が多い。調査はこの地域で比較的包含層を保っていると思われる、山尾端と畠地接続部との間の低平区域に三か所トレンチを設定した。



○ A トレンチ

巾 2 m 、長さ 10 m の東西に設定したものである。約 5 cm の厚さに表土があり、その下に灰白色粘土質の土層があり、この中に遺物が含まれていたが極めて少量であった。場所によって、この第二層の厚さは異なるが、約 30 cm より 50 cm の間で地山に達する。

以上の所見は B・C・D トレンチに於いても同様である。

○ B トレンチ

A トレンチに直交する形に入れたものであるが包有層は極めて薄く、出土遺物は殆んど認められなかつた。

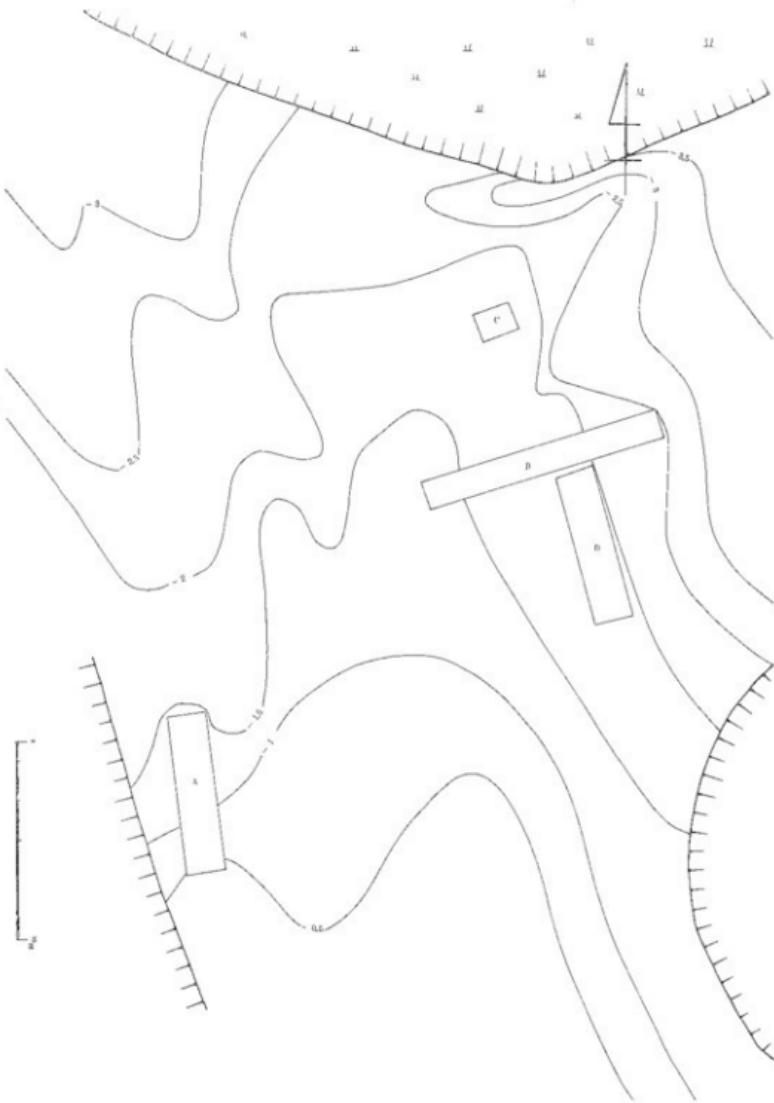
○ C トレンチ

Aトレントの西方15mに南北に入れた巾2m、長さ3mからは、顯著な包含層は認められなかった。

○ Dトレント

Aトレントの北方50mに設定した巾2m、長さ3mのものであったが、深さ10cmで地山に達し、包含層は発見できなかった。

第12图 B地区地形测量图(第1次)



2. 結 語

B 地区第一次調査地は女神神社から北に突出した小丘の北端部であった。出土遺物は殆んど認められず、弥生時代の遺跡についてもこれを確認するには至らなかった。

この地区から北方に亘る地域が弥生時代住民の居住地帯であることは、ほぼ認められている所である。ただ遺跡の中心は今回の調査地北側の、数年前に開墾中多量の弥生式土器が発見された隣接畠地にあたるようである。

この地域の居住者が墓地として尾根一つ隔てた A 地区を選んだとすれば、住居地と墳墓を隔絶し、しかも墳墓が小高い山丘の尾根上に営まれるなど、前記古墳の立地に共通する性格をもってきている点に興味がもたれる。

四 通谷 B 地区第二次調査

1. 調査の経過

○ 通谷 B 地区

通谷 B 地区 丘陵頂上の巾は、上方から（南）から下端（北）まで、何れも約 20m あるが、この尾根頂上中央部は自然の水路で、U 字状或は V 字状の凹みになり、深い所では巾 3m、深さ 1.3m の溝ができている。この部分は表土が流失していることは勿論であり、更に地山が削り取られている。又女神神社前（北側）の山道沿いから北方（下方）約 50m の間は既にブルドーザーで表土が削平されていた。丘陵北から畠地に接する間の低平地域は第一次調査を実施した所である。



そこで先づこの丘陵頂上部のブルドーザーで削平した下端部（北端）から小丘の北端までを調査区域と定め、丘陵頂上の自然の水路になっている中央の凹みをはさんで、東側と西側の尾根頂上沿いに、二本のトレンチを設定することにした。東側トレンチは南北の長さ 8.15m、巾 1m、西側のトレンチは南北の長さ 4.2m、巾 1m である。両トレンチの間は 7m 内外で両端に近い部分、丘陵中央部の水路が一番浅い所を選び、両トレンチと直交する長さ 2.07m、巾 1m のトレンチを設定した。

トレンチは 1m 巾に包含層を構成しながら地山に達するまで土砂を排除していったが、既に地山が露出している部分もあり、又土砂が 40cm 以上も厚く積っている部分もあり、包含層の厚さは一様ではなかった。この作業中に東側トレンチ沿いの a・b・c・d・e・f・g の 7か所から遺物の出土を見、それぞれの部分についてはトレンチを更に拡大して近辺の状況を確かめたが遺跡は見当らなかった。西側トレンチ沿いには遺物・遺跡の存在は確認できなかった。

第14図 B地区トレンチ





○ a 点の遺物

a 点の位置は東側トレンチ南端東側沿いの広さ 4.0 cm 四方である。出土遺物は弥生式土器片 40 片で、同一土器の破片とみられ、一個の土器の約 1/10 分の 1 の量である。

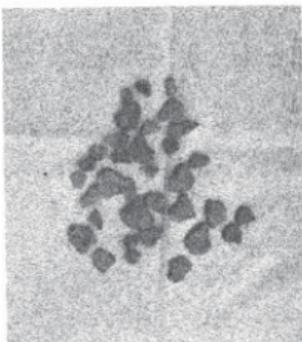
この土器破片群は、地表の背鈍土層厚さ 5 cm、その下に灰白色土層厚さ 6 cm、その下に黄褐色粘土層厚さ 1.4 cm が見られ、この黄褐色粘土層内に包含されていた。地表から 1.1 cm 程の深さから 2.5 cm 程の深さにわたる間で約 4.0 cm 四方の広さから出土した。

土中に含まれた状況は、すでに細片が散在しているという有様で、土器の残存部の形がわかるような状態ではなかった。

a 点から出土した弥生式土器片 40 片は何れも細片で、大きいものでも縦横共に 3 cm 程度にすぎない。

表面は灰白色、割れ口は黒色で、器形の特徴を示すような断片は見当らないので器形・大きさ共に不明である。厚さは 0.5 cm 内外で紋様等は見られない。

この土器片出土地は、ゆるい斜面で遺構の存在は確認できなかった。



○ b 点の遺物 (図版第 10 図)

b 点の位置は東トレンチ東側沿いで、a 点から 3 m 北方である。出土遺物は弥生式土器片 20 片で、同

一土器の破片と見られるが、一箇の土器の約5分の1の量、断片の中に壺の口縁部、首部の破片が含まれているので壺形土器と見られる。

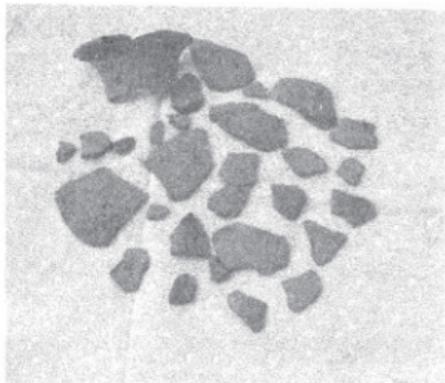
この土器破片群は、地表の腐蝕土層厚さ4cm、その下に灰白色土層厚さ7cm、その下に黄褐色土層厚さ9cmが見られ、黄褐色粘土層内に包含されていた。地表から11cm程の深さから20cm程の深さにわたる間で、長さ40cm、巾30cmの広さから出土した。

土中に包含されていた状況は、かなりの部分を失なった壺が残存している口縁部を斜上方に向けて押しつぶされた形で細片が累積していた。



土器片20片は、内外共に薄茶色、割れ口は薄茶色或は黒色のものが混っている。土器片の中に壺形の口縁部、首部が含まれている。これによると口縁部の直径13cm、首部の直径6.8cmで、口縁部がラッパ状に外反した壺で口縁上部から下方2.5cmから5.0cmの間に、へら書きの斜線帯が見られる。頸部の破片にも斜線帯の見られるものがある。

破片は細破し極めて、もろくなっているので残存部分を復元することは困難である。口縁部がラッパ状に外反し、首部が急に細



くなった壺であることから壺に類するものではないことは明らかである。

b 土器片群出土地は約20度の斜面で、何の遺構も見られなかった。

o c 点の遺物 (図版第10図)

c 点の位置は、b 点から3m北側りで、東側トレンチと直交したトレンチの直交点東沿いのトレンチ中央である。出土遺物は弥生式土器の高杯、ほぼ一箇の量で、細破した部分もあったが復元に成功した。

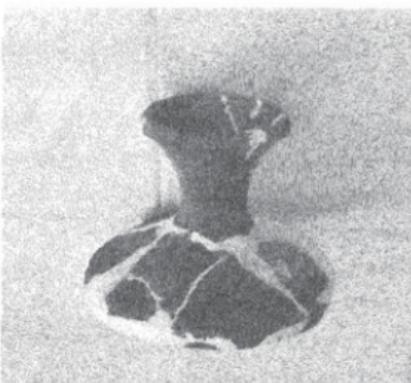
この土器は、地表の腐蝕土層厚さ5cm、その下に灰白色土層厚さ10cm、その下の黄褐色粘土層厚さ15cmの中に包含されていた。地表から15cm程の深さから30cm程の深さにわたる間で、縦横それぞれ30cm程の広さから出土した。

土中に包含されていた状況は、ほぼ完形の高杯の上部を斜上方に向け、横に倒れて押しつぶされた形で破片が集積していた。



c 点出土高杯の色は茶色、大きさは杯上部の口径17.5cm、台下部の直径10cm、高さは13cmを測る。高杯の内側の表面には、一番深い中央部から放射線状の、はけ目の跡が見られる。高杯の上部の縁は内側の深さ1.2cm、外側の縁は巾1.7cm外面に、やや巾の広い浅い四本の平行した横縫帶がある。台の下端から上方2.2cmから4.0cmにわたって、10本の平行した横縫帯が見られる。この横縫の最下部に沿うて小さい穿孔を、1cmと1.5cmの間を交互に保ちつつ並べた、穿孔帯がある。

c 点の高杯出土地近辺には、遺構の存在は確認できなかった。



○ d 点の遺物 (図版第10図)

d 点の位置は東側トレンチの南端から 5 m 程北の、トレンチ西側沿いである。出土遺物は弥生式土器片大小 120 片、土器一箇の約 5 分の 1 程の量である。細片の中に壺の口縁部、肩部の断片が混っているので壺形土器の一部であると見られる。

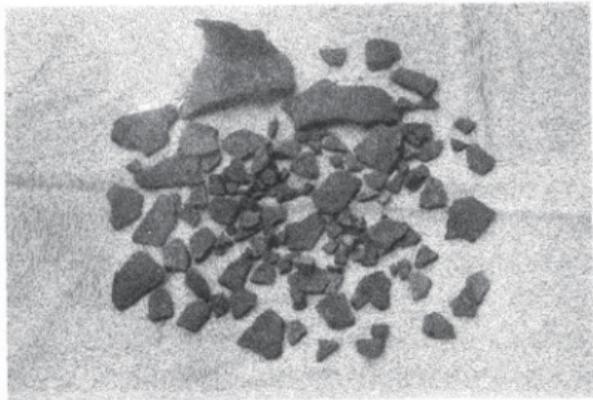
この土器片の一群は、地表の腐蝕土は流失し灰白色土層厚さ 10 cm の下の厚さ 15 cm の黄褐色土層に包含されていた。破片の一部は丘陵中央の脇に面して一端が露出していた。これが今回の発掘調査に至る契機となったものである。この土器破片群は、地表から 10 cm 程の深さから 25 cm の深さにわたる間で、縦・横それぞれ 40 cm 程の広さから出土した。

土中に包含されていた状況は、かなりの部分を失った壺形土器の、残存口縁部を、ほんの僅かに斜上にして押しつぶされた形で破片が集積し、この集積部分の西側面が流水のため削り取られていた。完全な壺が押しつぶされた形で埋蔵されていたものとすれば、約 5 分の 1 を残して、他の 5 分の 4 層の集積地は包含層と共に流失してしまったものと考えられる。

この遺物の大部分が包含されていた軽心な部分が失なわれているので遺物・遺跡についてこれ以上確かめることはできなかった。

d 点出土の土器破片群は、同一土器の細片であると見られるが、その形は破片に壺の口縁部が含まれているので壺形であろう。大きさは口縁部の直径 12 cm を測る。その他は不明である。破片の表面の色は薄茶色で、割れ口は薄茶色又は黒色のものも混っている。破片の厚さは 0.8 cm から 0.3 cm 程まであって一定ではない。

この d 点出土の壺形土器破片群は、或は壺棺ではあるまいかということは、この土器破片群に口縁部を含んでいることで、その考え方は成立しないであろう。即ち通谷 A 遺跡の壺棺は何れも口縁部を打ち



欠いで棺に用いていることが明らかにせられているからである。又壺の大きさが小形であること、これを埋めた遺構が認められないことからも、壺棺とはいえないであろう。

○ e 点の遺物

e 点の位置は東側トレンチ南端から北方 8 m のトレン

チ東側沿いで、東西トレンチと直交した北側である。出土遺物は弦文式土器細片 30 片で、一箇の土器の約 10 分の 1 量である。

この土器片群は、地表の腐蝕土層厚さ 5 cm、その下の灰白色土層厚さ 10 cm、その下の黄褐色土層厚さ 1.5 cm の中に包含せられていた。地表から 1.5 cm 程の深さから 3.0 cm の深さにわたる間で、直径 3.5 cm 程の広さから出土した。

土中に包含された状況は既に細片が散布している状態で、土器の残存部が判然とした有様ではなかった。出土した一群の土器片は、何れも同一土器の細片と見られる。

破片の表面の色は薄茶色、厚さは何れも 0.3 cm 内外のもので、大きさは細片が多く、大きいものでも縱横共に 2.5 cm 程である。

従って、この土器の器形や大きさは全くわからない。

e 点遺物出土地には、遺構の存在は確認できなかった。

○ f 点遺物

f 点の位置は東トレンチ南端から北方 28 m の、トレンチ東側沿いである。出土遺物は弥生式土器片 2 片とサスカイト薄片 3 枚である。

土器片は地表から腐蝕土層厚さ 5 cm と、その下の灰白色土層との接点に、この 2 箇の破片が並んで発見された。土器片の表面は朱色である。

サスカイトの薄片は、地表から腐蝕土層厚さ 5 cm と、その下の灰白色土層厚さ 10 cm の間で、広さ 20 cm 平方程に点在していた。3 枚共に縦 1.5 cm、横 3 cm、厚さ 0.2 ~ 0.3 cm 程の大さのもので、何等かの意図をもって加工した跡は認められない。

弥生式土器 2 片は、1 辺 5 cm 程度の正三角形と、縦 2 cm、横 4 cm 程の四角形の断片で、厚さは三角形の方が 0.7 cm、四角の方は 0.3 cm である。表面は朱色、この土器の器形や大きさは勿論わからない。

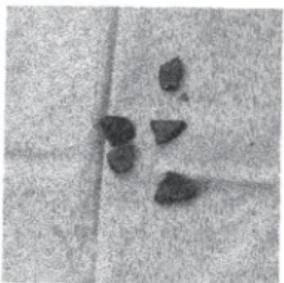
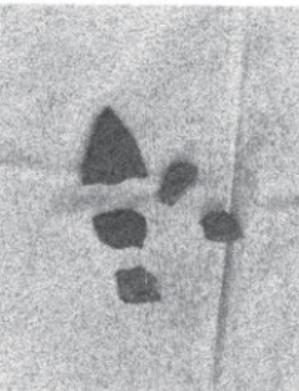
サスカイト薄片は、意図的な加工のあとがないので遺物とはいえないであろう。参考として付記するに止める。ここで、注意したいことは、同種の材料で造られた石鎚が、調査中に、この f 点から西南方 100 m の尾根から出土していること。又 f 点から約 500 m 北方の畑を、数年前開墾した時、多量の弥生式土器片が出土し、当時の住居地帯であったと見られていることである。

○ g 点の遺物

g 点は東側トレンチ南端から 54 m 北方のトレンチ西沿いである。出土遺物は弥生式土器細片 5 片で、土器底部の破片と思われるやや厚いものが 2 片含まれている。

この土器片は、地表の腐蝕土層が失なわれて灰白色土層が露出した地表に、それぞれ土器片の一端が僅かに躍出した状態で発見され、10 cm 平方程の広さの中に 5 片が点在していた。

土器片は何れも茶褐色で、厚い方は 0.8 cm、薄い方は 0.3 cm、同一土器の破片と見られるが、極めて少量に過ぎないので、器形や大きさは全くわからない。



2. 結 論

通谷B地区の出土遺物は、7箇所から7種の弥生式土器の破片と、サスカイト窓片3片である。その中、C点出土の高杯は、ほぼ完形のものが埋蔵されていた。d点出土の壺形土器破片群は120片で同一土器の約5分の1量と見られ残りの部分は流失したものと考えられる。

b点出土の壺形土器破片群は20片で同一壺の約5分の1量、a点出土の弥生式土器破片群は40片で、同一土器の約10分の1量、e点出土の弥生式土器破片群は30片で、同一土器の約10分の1量である。f点出土の弥生式土器破片群は僅かに小断片2片、g点出土の弥生式土器破片群も、僅かに小断片5片である。

7箇所から7種の弥生式土器が出土したが、cとdの2箇所は、ほぼ完形であったことが認められるが、他の5箇所は完形の約5分の1量、或は10分の1量、又は、ほんの断片に過ぎない。

その散在の状況はa・b・c・d・eの5箇所は巾約4m、長さ約8mの間に群在し、fはここから20m北方、gはfから更に26m北方に離れている。従ってa・b・c・d・eの5箇所の1群は、弥生時代の何等かの遺跡と直接つながるかも知れないと思われる場所であり、f・gの2箇所は、二次的な弥生式遺物の散在地と考えられるであろう。

a・b・c・d・e 5箇所の一群の遺物出土は如何なる性格をもつものであろうか。出土地が何等かの遺跡そのものであるのか、或種の遺跡の周辺部に当つていて、これ等の遺物が群在しているのか、単に遺物の二次的な散布地に過ぎないのであろうか。

これを解明する鍵は、この一群の出土地の西沿い地区を調査することであるが、この部分はU字状の水路になって、広く、深く削り取られ、その跡を止めていないので、これを確かめる術を失なわせている。

本地区の調査に当つて、調査範囲を最終的には丘陵頂上部の巾約20m、長さ8.1.5mの広さに限定したものであった。

この地域は尾根頂上中央部が自然の水路になりU字状又はV字状に凹んで、深い所では巾3m、深さ1.3mの溝ができる、堆山が浸食されている。

又この尾根のゆるやかな傾斜地を利用して、大正時代まで草競馬が行なわれる度に地肌の削平や土盛りが繰返されたことを土地の人達は語り伝えている。

更に庭木ブームのため、近年この山尾の見事な松の木を掘取った跡が調査地域の至る所に点在している。

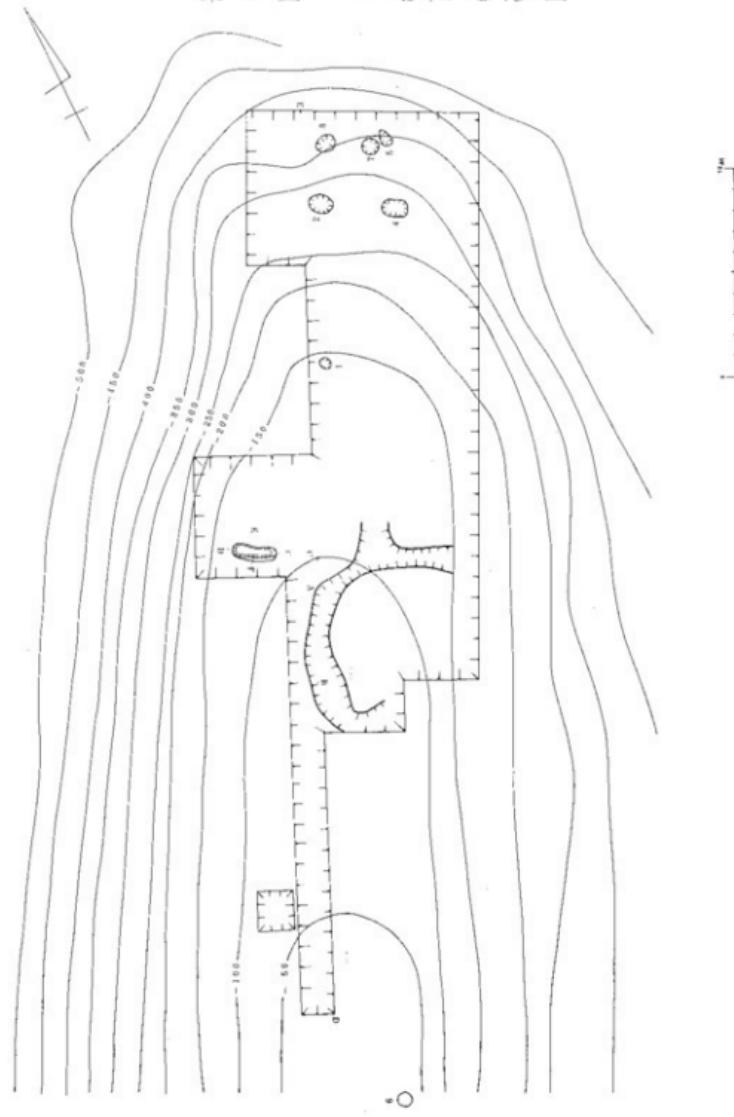
上記のようにこの調査地域の山肌の原形が自然的、人為的に著しく擾乱せられていることは調査の障害となり、実態の把握を困難にした。

通谷B地区は、弥生式遺物の散布地、包含地であることは、B地区第一次・第二次の調査によって確認されたが、遺跡や遺構は発見されるに至らなかった。

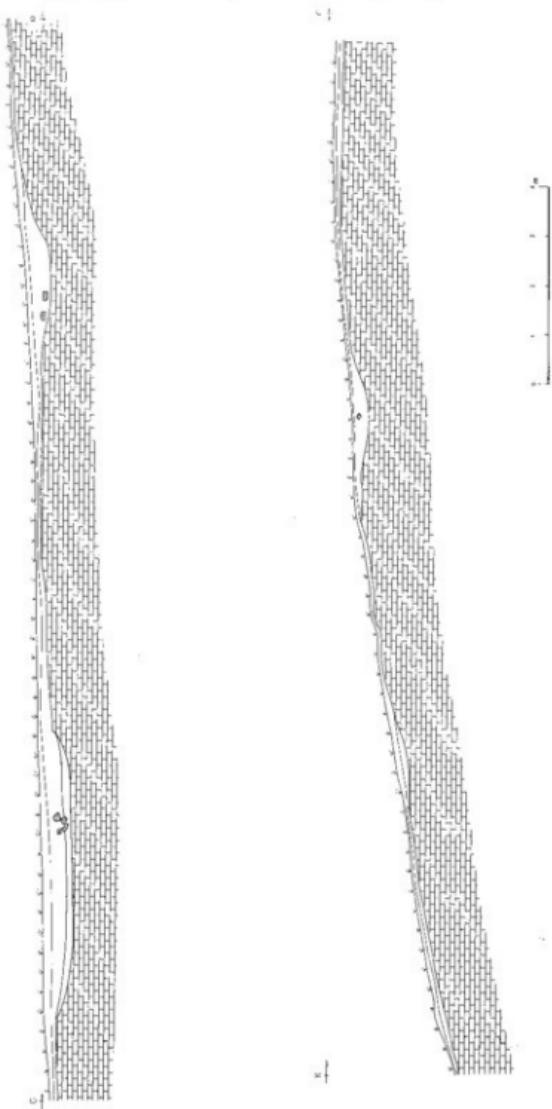
B地区の北方500mに弥生式土器を多量に出土した、当時の住居跡と推定されている所があり、又B地区から馬根一つ馬でた東彌りの縁線にはA遺跡があって、当時の墳墓群が明らかにされている。

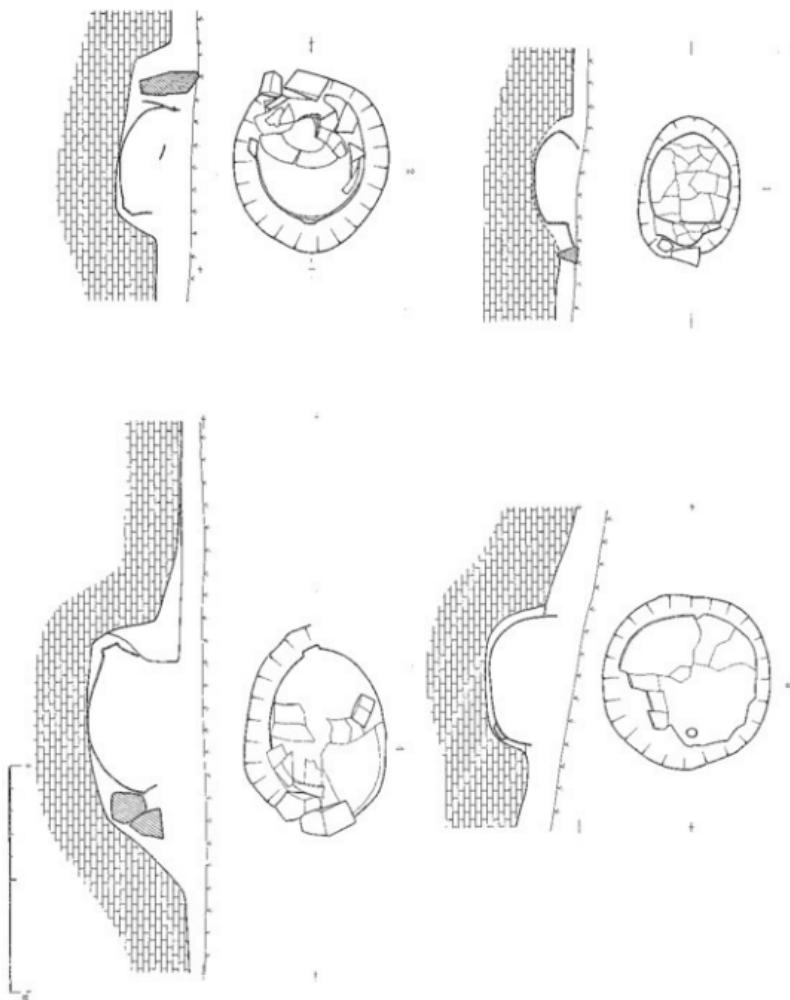
B地区は、この住居跡と推定されている所と墳墓地を結ぶ中間地域に当っていることから、当時の遺跡や遺構とは直接つながらなくても、密度の高い遺物の散布地・包含地となっているのであろう。

第1圖 A 地區地形圖



第2図 C-D、D-E セクション





第3圖 蕤縉出土陶器(1・2・3・4号)

第4図 壺棺出土状況(5・6・7号)

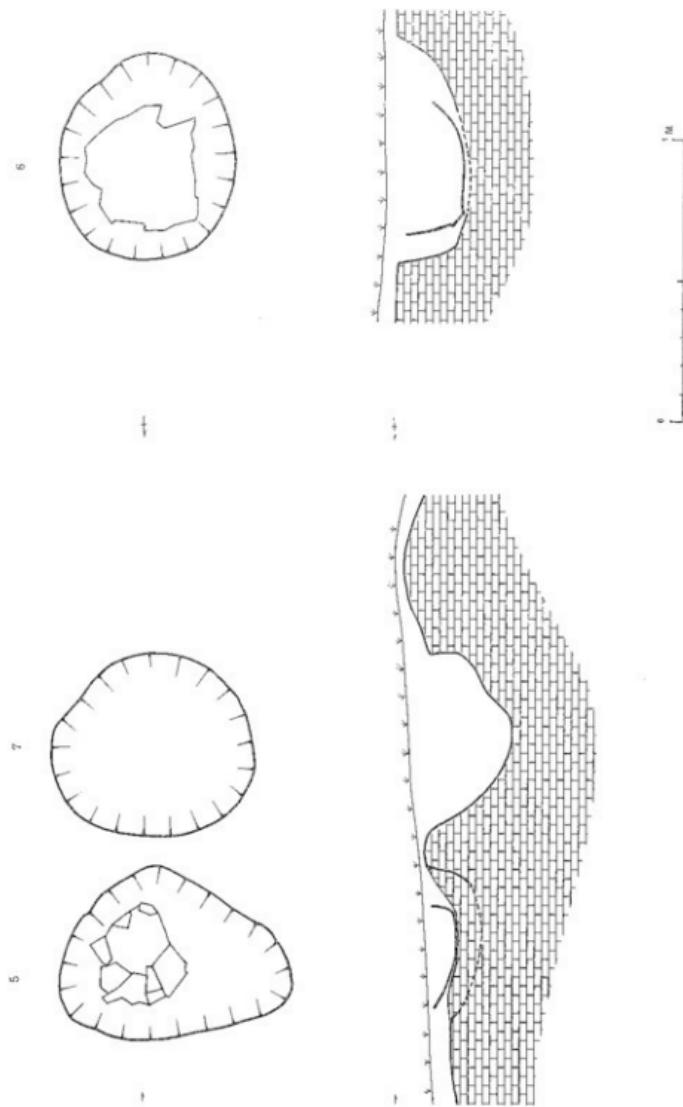
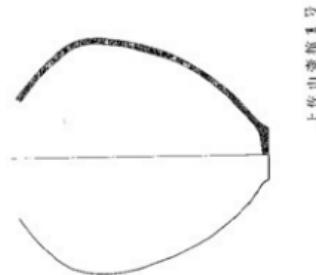
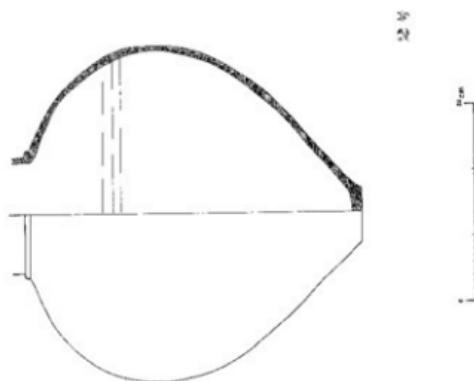
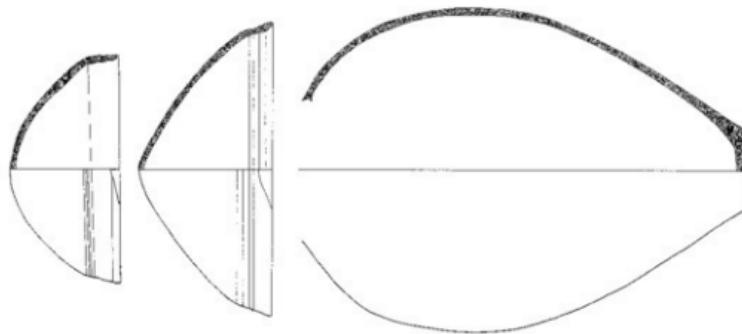


圖 1-2 瓦棺復元圖



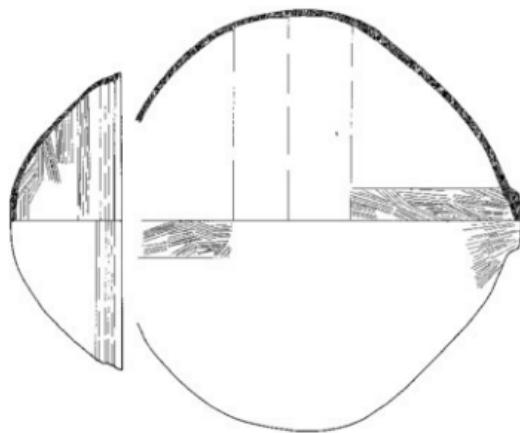
第6図 壺棺復元図(3・4号)

左

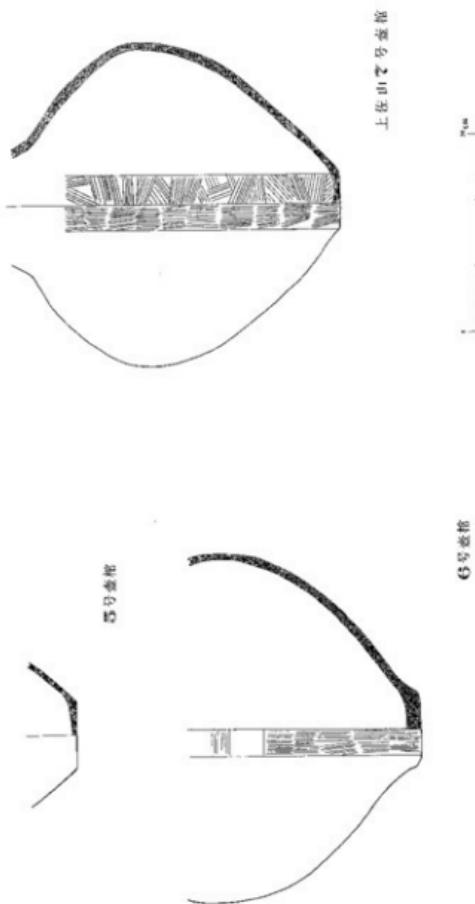


上左山東省3号

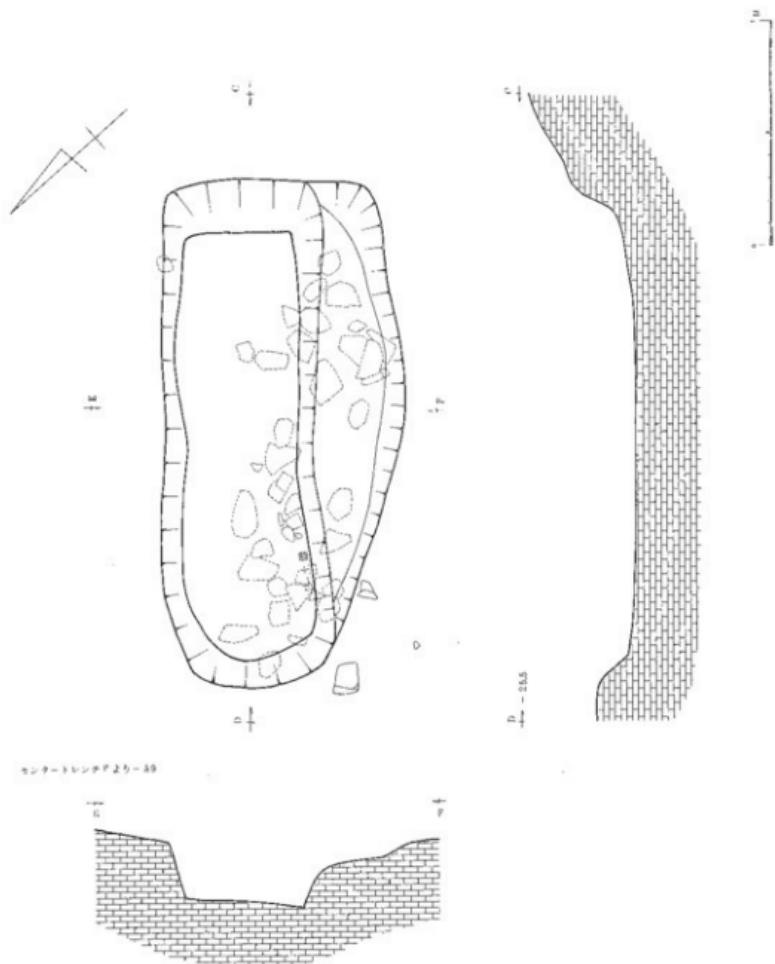
右



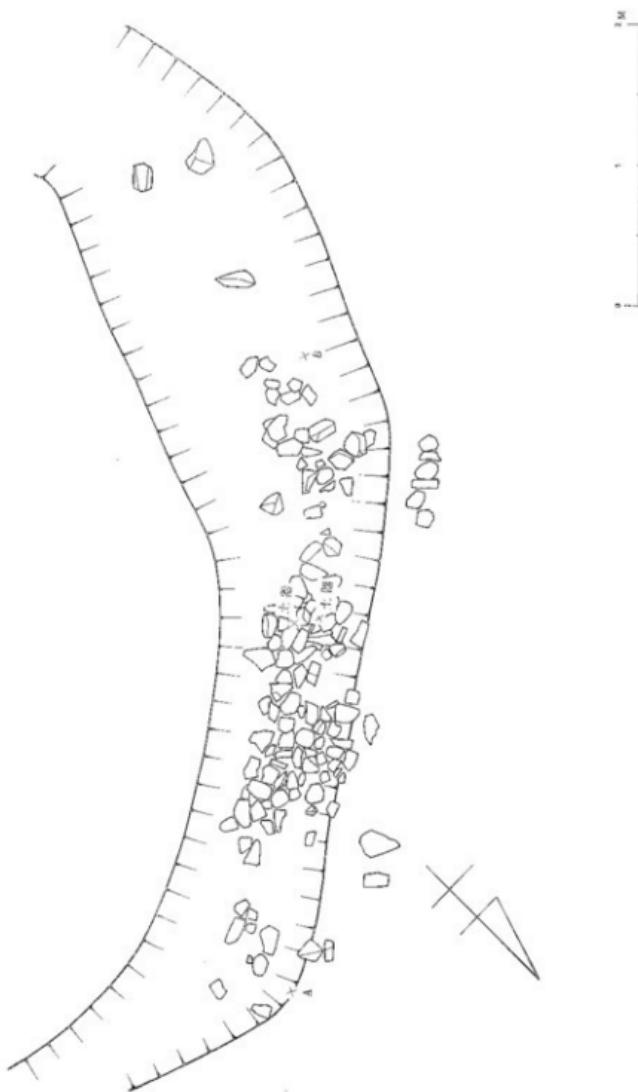
第 7 圖 壺棺復元圖（5・6・7 号）



第3図 土壌墓実測図



第9圖 配石遺構実測図



第10図 B, C, D 遺物 實測図

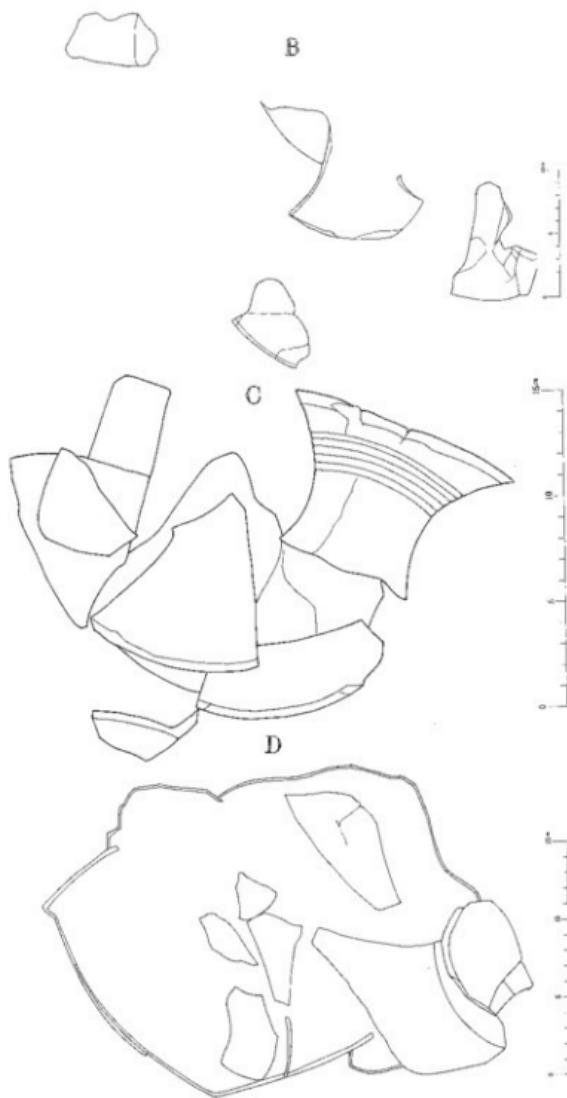
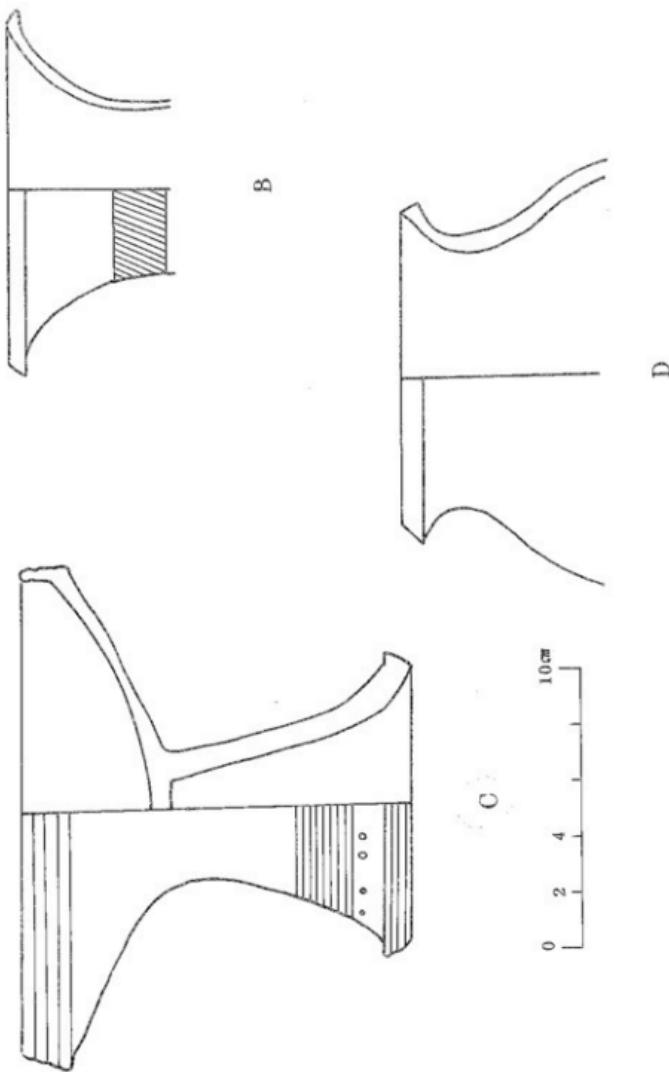


圖 11 B 岩石構造復元圖



昭和49年12月27日発行

編集 高松市教育委員会

発行 高松市教育委員会